アマゾンの旅が教えてくれた

人生が豊かになる25の教え

ヒロ カズマ
Kazuma Hiro

ハーバード大学
×
アマゾン原林

幸せの研究音声
プレゼント！

先住民族から学んだ
「お金」と「不安」の幻想を
解く方法をこっそり公開します。

きぼう出版

目次

はじめに

出発準備編

その１　『お金がない生き方ってどんなものか見てみたくない？』
その２　『アマゾンの奥地に行く準備って何がある？』
その３　『たった９キロの荷物でアマゾンに入るには』
その４　『準備の最後は、神頼み』
その５　『２４時間の移動、そしてエクアドルの首都キトへ』

アンデス編

その６　『赤道では体重が軽くなる！』
その７　『プレインカ帝国の民ケチュア族の村』
その８　『牛が子猫のように甘える世界』
その９　『アンデスの二人のシャーマン』
その１０　『繋がりを感じるという生き方』

いざアマゾン編

その１１　『最新鋭機でジャングル突入！！』
その１２　『雲霧林から熱帯雨林へ泥の中へのランディング』

その１３　『生きることにまったく心配のない生活』
その１４　『命の飲み物～チチャ』
その１５　『生涯をかけたミッション』

アマゾン編

その１６　『ジャングルウォーク』
その１７　『宿泊先は、高床式住居』
その１８　『ジャングルの夜明け』
その１９　『アチュアル族の村訪問』
その２０　『いまのアチュアル族とお金の関係』

夢見編

その２１　『夢を読み解く種族』
その２２　『ジャングルにいないもの』
その２３　『驚くべきシャーマンの世界』
その２４　『親密感と分離感』
その２５　『ワシの世界とコンドルの世界の融合』

おわりに

はじめに

現代は本当に豊かになったと思います。でも、その一方で人の心はどんどん不自由になっている様に感じるのは私だけでしょうか。「自由に人生を生きる」「豊かさを感じながら後悔のないように毎日を過ごす」このような言葉はよく聞きますが、どれほどの人がそれを実践できていると思いますか？

自由に生きる、豊かさを感じながら生きる、これらは全部「自分の心一つ」のはずです。それなのに、なかなかそうやって生きることは難しい。

私のメンターであり、今回アマゾンの奥地へと私を誘ってくれた世界的講演家のリン・ツイストは、自由に生きることが難しく感じる原因の一つに、多くの人は『欠乏の神話』を信じているからだと教えてくれました。

『欠乏の神話』とは、簡単にいうと、現代人は何がしたいのか？なぜ必要なのか？ということすらわからないのに、お金が「もっともっとほしい」「まだまだ足りない」「不安だ」と思い込んでいるというものです。そして、日々にかかる費用、食費、保険、家賃、ローン、老後の資金など、常にお金のことで頭を忙しく働かせているのです。

今回、私が訪れたアマゾンの熱帯雨林で暮らす先住民族は『お金の不安』を持っていませんでした。そもそも、彼らは『お金という概念』すら持たずに何百年、何千年と暮らしてきたからです。彼らは、森やアマゾン川から獲ってきたものを、すべて部族のみんなで分けて、なにかを独り占めするということをしません。所有するという観念もなかったのです。

もちろん、だから「みんな、ジャングルで暮らそう！」なんて極端なことを言うつもりはありません。日本と大自然のなかのアマゾンは別だ、そんな声も聞こえてきそうです。ただ、彼らのあり方には学ぶべきところが沢山ありました。この本の後半にも書かせていただきましたが、先住民族の伝説にある「ワシの世界とコンドルの世界の融合（現代と古代の融合）」は、この地球上に生きる全ての命にとっていちばん大切なことになるでしょう。

本書を書くにあたり、今回の旅を丁寧に振り返る時間を持つことができました。そこで得られた様々な体験を思い出すうちに、この旅は、「人類の生きる方向性を確信するために行ってきたのではないか」とすら思えてきました。

また、読者のみなさんには、この旅の記録を読んで頂くことによって、「アマゾンは危険だ」「生きて帰れない」「猛獣がいる」「アマゾンの部族は野蛮だ」などという、ありきたりなイメージを払拭してもらえ、私が体験した真実のアマゾンを感じてもらえると思います。

本書を書くにあたり、きっかけを与えてくださったリン・ツイストさん並びにセブン・ジェネレーションズのみなさん、現地ガイドのダニエルとクリスティーナ、そして暖かく迎えてくださったアンデスとアマゾンの先住民族のみなさんに深く、お礼を申し上げます。

ヒロ　カズマ

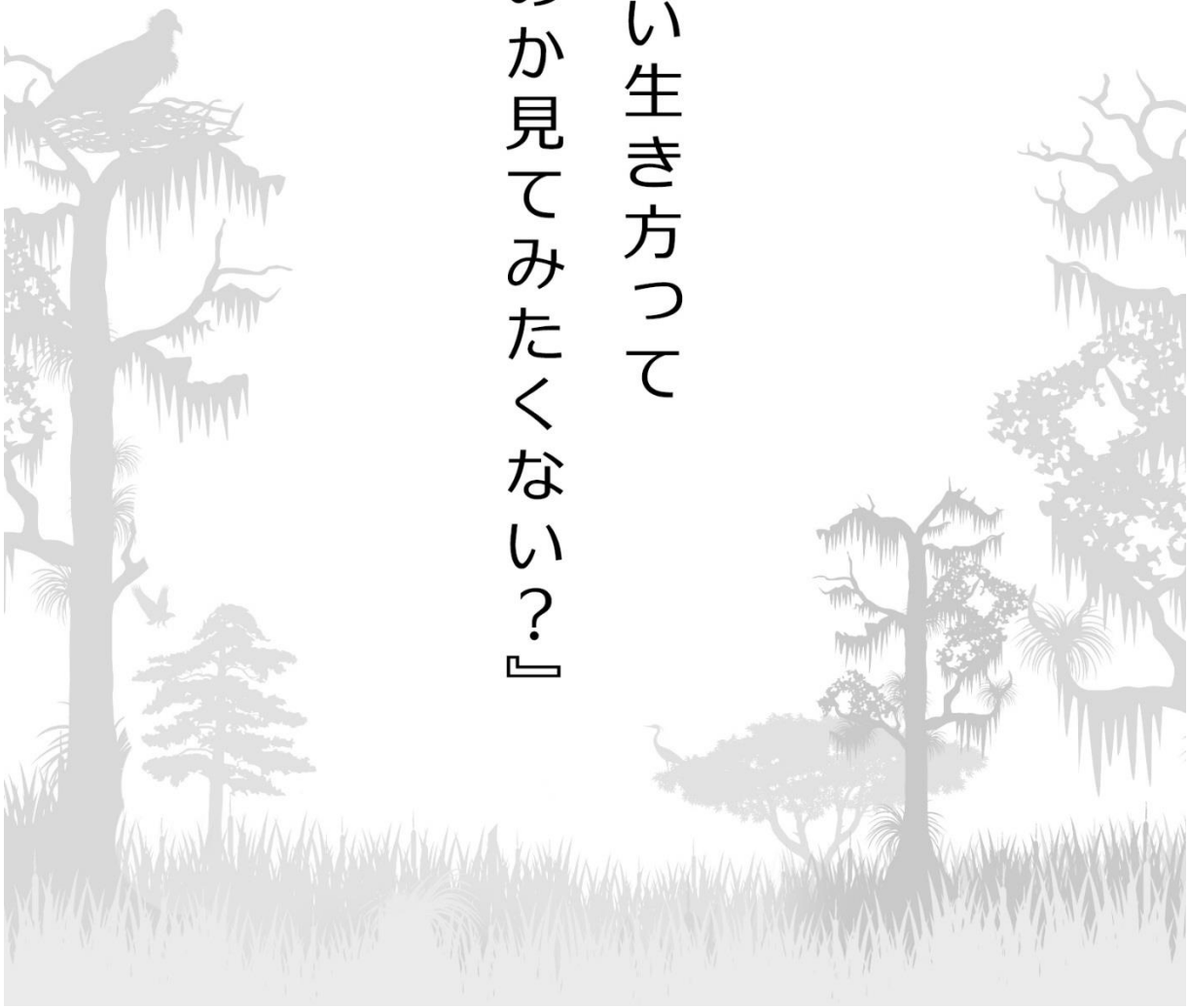
【無料プレゼント】

本書では、アマゾンへの旅を順番にお話ししていく行程に合わせて、２５の質問をご用意しています。私が実際にその行程の最中に感じていたことを中心に作ることで、まるで一緒に旅をしているかのような疑似体験ができるように、という趣向です。そうでなくても、普段あまり考えることのないことを通して、いろいろなインスピレーションが得られると思います。もし興味のある方は、以下のアドレスからダウンロードできるようにしてありますので、ぜひ使ってみてください。

→https://www.fvs.jp.net/form/?id=88&key=ODgxMTE3NTY

出発準備編
その１

『お金がない生き方って どんなものか見てみたくない？』



「どうして、アマゾンに行こうと思ったのですか？」

旅から帰ってきて、よく聞かれました。

アマゾンに行きたいと思い立ったのは、出発の2年前のことです。南米アマゾンの奥地にお金という概念を持たない種族がいて、その人達が、こちら側の文明にメッセージを送っている。そんな話を聞いたからです。

「お金がない世界を観たい。そこで暮らす人々のありのままの姿を観てみたい」

そう思いました。

何百年何千年とお金という概念をもたずに暮らしてきた種族、彼らがどのような感覚で生きているのか？いま、どのように生活を営んでいるのか？この目で、この肌で、実際に体験したかったのです。

さらに、彼らのシャーマンが、私たちにメッセージを送っているというのです。何百年も接触を持たなかった種族がわざわざ危険を犯してまで接触してきた。私達にメッセージを伝えるためにです。そのメッセージを直接聞きたいと思いました。本当に何を語っているのか？本で読んだり、誰かからの又聞きでなくて、「実際に彼らが、いま、何を伝えたがっているのか？」それを聞きたいと思ったのです。

このことを初めて知ったのが、２０１４年5月のことでした。リン・ツイストというアメリカ人女性から聞きました。彼女は、飢餓を撲滅する運動を国際的に展開されていて、その後、アマゾンの先住民を守る活動に専念されるようになりました。パチャママ・アライアンスというアメリカに本部がある団体を作りアマゾンの環境を保護しています。

その日本の関連団体がセブン・ジェネレーションズと言う団体です。そこのみなさんにコンタクトをとり「アマゾンに行くときは、是非、誘ってください」と、お願いしていました。こうして、2年越しの願いが叶ってアマゾン旅行に行くことになったのです。

あなたの願いは何ですか
どこかに行きたい？
何かになりたい？
何かを得たい？
それとも、
お金が欲しいのでしょうか

あなたは、いったい何を
求めて生きていますか

出発準備編
その2

『アマゾンの奥地に行く準備って何がある？』

世界で一番の秘境ってどこでしょう?南極?北極?それともエベレストの頂上でしょうか?
アマゾンの奥地は、それらと比べても引けを取りません。もしもアンケートをとったら、アマゾンが堂々一位になるかもしれません。そのアマゾンのジャングルに行く準備とは、いったいどんなものがあるのでしょうか。

私が、一番目に取り組んだ準備は、体力作りでした。

アマゾンに行く前には、森に入ると、とんでもない野獣や、大きなヘビ、観たこともないような昆虫が至る所にいると思っていました。それらに襲われないためにも、また、ジャングルを歩き回るためにも、かなりの体力がいると思ったのです。

そこで、いつもトレーニングを観てもらっているパーソナルトレーナーにお願いして身体を強化してもらいました。スクワット、デッドリフト、ベンチプレスで毎回、追い込んでもらったのです。さらに、近くにオープンしたキックボクシングジムに入会して、パンチやキックで絞り込んでいきました。

二番目の準備は、柔軟性です。
身体を鍛えるだけでは、怪我が心配です。特に旅行前や旅行中の怪我は致命的です。そのため身体の柔軟性を高めておく必要性があると考えました。スポーツストレッチ専門店にいき、筋膜の癒着を外したり、関節を伸ばしてもらって、柔軟性を集中的に上げてもらったのです。

三番目の準備は、感染症対策です。
今回はエクアドルからアマゾンのジャングルに入りましたが、南米のジャングルの奥地は、ウイルスや細菌など感染症に対する注意が必要です。外務省の海外渡航者用のホームページには、エクアドルの医療事情に関して様々な情報が記載されていました。

その情報から、肝炎、腸チフス、狂犬病、破傷風の４種類のワクチンとマラリア、高山病の予防薬を旅行者用クリニックでお願いしました。予防薬は内服のお薬ですので問題ありませんが、４種類のワクチンの摂取方法は筋肉注射です。

左右の腕に、二本づつ注射を打たれて、これがなかなか痛みが伴います。慣れた看護師さんだったので、テンポよく4本を打ってくれましたが、思わず「痛！」と声が出るくらいでした。

しかも、これが一度きりではないのです。免疫抗体をつくるためには、2週間に一度の接種で3回も打たなければなりません。こればっかりは、旅行前にメゲそうになりました。最後には、もうどうにでもしてくれって開き直ってしまうぐらいでした。

この予防接種、注射が痛いだけでなくて値段も張ります。保険が一切効かないので、総額で8万円以上も治療費がかかります。3年以上効果があるそうですが、アマゾンのような場所に行く場合、渡航費用以外にも考えに入れておかなければならない部分です。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

過去になにか厳しいと感じながらも
なんとか乗り越えたことはありますか？
そのとき、どうやって乗り越えられたのでしょう。

時々、なにかを乗り越えたときのことを
思い出せると
あなたの中の自信が増していくでしょう。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

出発準備編
その3

『たった9キロの荷物でアマゾンに入るには』

アマゾンのジャングルに入るためには、街から小型のセスナ機に乗っていきます。エクアドルの首都のキトから、バスで半日以上走るとジャングルの縁にあたる街プヨにつきます。そこには、小さな空港があり、アマゾンへの玄関口になっています。

セスナ機に乗り込むのですが、飛行機が小さいために持ち込む荷物に制限があります。通常は１１キロですが、今回は、記録映画をとるための撮影スタッフが同行していて、重い撮影機材を持ってきていました。そのため、ひとり９キロの荷物制限になっていたのです。

一週間ジャングルで過ごすのに、たった9キロです。バックパックの重さだけでも2キロあるので、正味7キロでまとめなければなりません。さて、何を持っていったら良いのでしょうか？
ジャングルの最深部です・・・

近くの登山アウトドア専門店で相談しました。そこで、まず勧められたのが「防虫効果のある服」でした。日本の繊維メーカーと殺虫剤メーカーがコラボして創った服で、表面にナノテクノロジーを使い防虫剤を接着している服です。これは現地で重宝しました。

ジャングルの中は、とにかく蚊が凄いのです。森に入ったらすぐ３０匹ぐらい周りについてきます。歩いているとまだ良いのですが立ち止まると大変。蚊が追いついてきて、顔や身体の周りにまとわり付くのです。でも、この防虫機能のある服を着ていると、蚊が寄ってきません。服に止まることはありますが、刺さずに飛び立つのです。科学の勝利です。

私は、その防虫服の長袖カーディガンタイプとタイツを買って全身を完全にガードできるようにしました。あとは、普通のＴシャツと短パンでＯＫ。これだけで荷物がかなりコンパクトになりました。

そして、雨具。ジャングルは、熱帯雨林気候です。一日に一度は、雨が降ります。そのため常にリュックの中に雨具を入れておく必要があります。そして、その雨具もしっかりとしたものが必要です。

店員さんに勧められたのが、ゴアテックス製の耐水圧が高いレインウエアーです。

あるとき、ジャングルの移動で、８時間、小型ボートに乗ってアマゾン川を移動する日がありました。滝のような雨が降っている日で、船べりでずっと雨に当たりながら座っていました。しかし、ゴアテックスを使ったレインウエアーは、蒸れることもなく、水も染み込んで来なかったのです。風も遮断してくれるので、ウインドブレーカーの代わりになりました。熱帯雨林で快適に過ごすには必要不可欠なものだったのです。

もうひとつ、森のなかで重宝したものがあります。それは、小型のヘッドライトです。近年はＬＥＤを使うことでより明るく小さくなり、胸や頭に付けてもまったく邪魔にならなくなりました。

アマゾンの夜は、漆黒の闇になります。数百キロ四方、人工の光がないからです。トイレに行くにも、足元を照らすライトがなかったら一歩も移動できません。コンパクトで明るいライトは必需品なのです。

これらの他には、寝間着用の長ズボン、下着類、カメラ、薬（特に虫刺され薬）、速乾タオルなどを持っていきました。

最初、それらを、なにも考えずに詰めこんだときの重さは１４キロでした。それを、ひとつ減らし、ふたつ減らしと、どんどん減らしていって、最後は９キロにおさめることができました。

結果的に、この９キロは、ジャングルの中で一週間過ごすのに必要十分な量でした。ギリギリまで絞って必要なものだけを持っていく。持っていったもの全部に役割があり、全ての持ち物と、繋がっているという状態が創られました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

あなたの持っているものを

半分にしてみると
どんな感じになりますか？

あるいは、１／３にしてみたら？
そうしたときの感覚を
想像してみてください。

あなたの身の回りのものに
全てに役割があって
過不足ない状態

もしも、そんな風になったとしたら
その時、あなたはどんな気分になるでしょう。

出発準備編
その4

『準備の最後は、神頼み』

体力、予防接種、９キロの持ち物、３つの大切な準備ができたので、最後は、神頼みです。

出発の１０日前、他の参加者が、東京でお参りに行くとメッセージをもらいました。そこで、関東と関西で時刻を合わせて『合わせ祈り』をしたら良いかもしれないと閃きました。その日は、指定された時刻に京都で用事があったので、京都の八坂神社に行くことにしました。

八坂神社は、スサノオノミコトを祀っている全国２３００社の総本社です。お正月の初詣や7月の祇園祭には１００万人のひとが集まるような人気の神社です。

　この八坂神社では、本殿で御祈祷していただきました。神主さんから旅行安全の祝詞を読んでもらい、巫女さんには巫女舞を踊ってもらったのです。

　この御祈祷を受けている間、ふと気がついたことがあります。それは、自分の祈りの真剣さ加減です。いままで、インド、イースター島、オーストラリアの未開拓地など世界の様々なところに行った経験があります。でも、これほどまで真剣にお祈りしたことはありませんでした。それだけ、今回の旅に危機感を持っていたのだと思います。

　ジャングルの奥地。日本人が、ほとんど足を踏み入れたことがないような場所です。現地のことが全く想像のつかいない旅なので、心のなかに恐れが育っていました。

　御祈祷の間、その恐れを感じてみました。「自分は、なにを恐れているのだろう？」「どうなったら、いやなんだろう？」と。その答えは、毒虫やウイルスなど、わけのわからない怪我や病気を恐れていたのです。その実態がわかると、恐れも小さくなっていきました。そして、御祈祷が終わるころには、こころが平安になっていました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

　あなたは、いままでの人生で

真剣に神頼みしたことはありますか？
それは、どんな時だったでしょう？

自分の手が届かない時
ひとは祈ります

委ねるということを
学ぶ機会でもあります。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

出発準備編
その5

『24時間の移動、そしてエクアドルの首都キトへ』

出発の日、成田空港で、アマゾンを一緒に訪ねる仲間１８名（私をいれて総勢１９名）と対面しました。Skype やzoom などインターネット回線を通じて、事前にお話をしてきましたが、直接お会いしたのは始めてという方が大半です。

環境保護団体の代表をされているけど普段は主婦。アウトドア体験をガイドしている元科学者。世界的に有名な環境保護団体に務められていた方。書家。普通のＯＬ。会社員。さまざまなバックグラウンドを持っている人々の集まりです。そこに、今回の旅の記録映画を撮ってくれた二人も加わります。

エクアドルまでは、デルタ航空を利用しました。そのため、デルタ航空の本社があるアトランタでトランジットです。東京からアトランタまで１万１０００キロ、飛行時間は、１３時間でした。５時間のアトランタでの待ち時間の後、エクアドル行きの飛行機に乗り換えて６時間のフライトです。合計２４時間。丸一日がかりのフライトで、まさに地球の反対側に来たという感じがしました。

今回の旅の目的地であるエクアドル。私達日本人にとってはあまり馴染みのない国かもしれません。国の名前を聞く機会があるのも、エクアドル産バナナ、サッカーチーム、チョコレート原産国、その程度でしょう。

エクアドルは、北がコロンビア、南がペルーに挟まれた国です。南米大陸では、一番小さな国ですが、日本の２／３ほどの大きさがあります。国名のエクアドルは、赤道という意味です。この国は、まさに赤道直下の国なのです。

飛行機がランディングする場所は、エクアドルの首都キトにあるマリスカル・スクレ国際空港です。この国際空港は、２０１３年に開港したばかりの真新しい空港です。２４時間の拘束から解き放たれて、私は思わず駆け出したくなりました。でも、ちょっとおかしい。ターンテーブルからスーツケースを取り出したときにも、心なしか動悸がしました。それもそのはず、この空港は、標高２８５０ｍのところにあります。富士山の七合目にあたる高さなのです。

首都キトは、高いアンデス山脈に挟まれた盆地にあり３０００ｍ近い高地に街が広がっています。地表よりも酸素が３０％も少ないので急に走り出したり騒いだりしたら、とたんに身体に不調を感じるのです。高山病の恐れもあります。しばらくすると慣れましたが到着直後は、静かにしていた方が良いようです。そこで、あまりはしゃがないようにしながら、空港の外で待ってくれていたバスに乗り込むことにしました。

そこには、現地のベテランガイドである、ダニエルとアシスタントのクリスティーナがいました。ダニエルは、パチャママ・アライアンス（アマゾンの保護団体）の創設メンバーで、アチュアル族とリン・ツイストを、引き合わせた人物でもあります。

師弟でもあるダニエルとクリスティーナの息はピッタリで、未開の土地のガイドを安心して二人に任すことが出来ました。

あなたは高山体験ってありますか？
酸素が少ないって
どんな気分になるのか
体験のある人は思い出してみましょう。
ない人は、想像してみてください。

アマゾンの森林が供給している酸素は
この地球上の３０％をまかなっています。
もしもなくなったら・・・
どうなりますか？

アンデス編
その6

『赤道では体重が軽くなる！』

赤道は、地球上で一番、体重が軽くなる場所です。

そう書くとビックリしますか？地球は自転しているので、赤道では、遠心力が一番強くなり重力と相殺されて軽くなるのです。遠心力のかからない極地と比べると約１パーセントほど重さが減り北極や南極で体重６０キロの人は、赤道では５９．４キロになります。

エクアドルを訪れた観光客の多くは、キトから４０キロ離れたところにある赤道モニュメントに行きます。そこの広場には、地面に赤い線が描かれています。もちろん赤道をしめした線です。その描かれた赤道を見ると誰もがやりたくなることがあります。右足を北側に左足を南側に『北半球と南半球を股にかける』という格好です。やってみるとなんだか巨人になった気分になるから不思議です。

広場には高さ２０ｍぐらいの煙突もありました。この大きな煙突型モニュメントは下から覗くことができるのです。普段は空や雲を見上げることになるのですが、春分と秋分の日の正午には、太陽が見えます。私達が到着したのは秋分に近い時期で、しかも、正午に近かったので、かなり太陽は真上にありました。しかし、煙突の下から覗いてみると、ぎりぎり太陽を拝むことは出来ませんでした。

この赤道直下の太陽が真上に来るという条件は、植物の育成に大変都合が良いそうです。茎は、真っ直ぐに育ち、葉は、偏りなく均等に付きます。さらに紫外線が多いので花は色鮮やかになります。

この環境は、バラ栽培に最適でキトの周辺にはバラ栽培用のビニールハウスが、沢山設置されていました。美しく大きく育つエクアドル産のバラはヨーロッパやロシアで大人気です。高級生花として各国に輸出されているのです。

この煙突型モニュメントには、ガイドが常駐してくれています。いろいろ赤道に関する話をしてくれました。例えば、お風呂の栓を抜いて水を流すとき北半球では反時計回り南半球では時計回りに渦ができます。では、赤道では？

なんと、渦ができずにそのまま流れるというのが正解です。

また、台風は赤道直下では出来ません。赤道を少し離れた部分でしか発生しないそうです。そして、渦は北半球は反時計回り南半球は時計回り。これら2つとも、昔、物理で習ったコリオリの力によるものです。大いなる地球の自転による物理的な作用なのです。

こんな楽しい話をしてくれた、このモニュメントのガイドさん。DVDを売っていたので、お土産に買ってみました。日本に帰ってからそれを再生してみると中身は全てスペイン語。チンプンカンプンです。エクアドルの公用語はスペイン語。勝手に英語で話していると想像してしまった自分がすこし可笑しかったです。でも、映っている景色は最高に綺麗なものでした。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

太陽の思い出はありますか？
あなたが子供の頃
太陽を仰ぎ見たことは？

最近、太陽を感じたことはありますか？

次に太陽を見たときに
しばらく太陽を感じてみてください。
生命エネルギーの源です

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

アンデス編
その7

『プレインカ帝国の民
ケチュア族の村』

エクアドルに到着後、私たちは、アンデス山脈に暮らす民、ケチュア族が住むサン・クレメンテ村に向かいました。サン・クレメンテ村は、標高４６３０ｍのインバブラ山の中腹にあります。

ケチュア族は、プレインカ帝国の文化を継承しています。いまから６００年前にインカ帝国がペルーからエクアドルにかけて支配するようになりました。その支配の前の文明をプレインカ帝国時代といいます。

また、５００年前には、スペイン人が南米に到達し、金を強奪するために南米の人々を徹底的に惨殺しインカ帝国を滅亡させてしまいました。そういう意味で、ケチュア族の人々は、インカ帝国とスペイン人により二度に渡って蹂躙されたわけです。そのことを言い伝えとして、今でも部族の中で語り継がれています。

そのサン・クレメンテ村に２泊します。しかも、１９名が、何組かに分かれてホームステイさせてもらいました。村に到着したのは、夕方です。深い霧がかかっていて幻想的でした。レンガ作りの農家が並んでいて犬、ラマ、牛、鶏がいるのが見えました。

まずは、村の公民館みたいな場所に通されます。そこで、族長からウェルカムスピーチを受けました。彼らの歴史的なこと、これからの流れを説明された後それぞれのホームステイ先に別れます。もうその頃には、日が暮れかかっていました。

私は、村の一番外れにある族長の末弟ラウルのお家にお世話になりました。荷持を運び込んで家族とご対面です。ラウル、奥さんのナンシー、息子のエディー。そして、これは後で知ったのですがお母さんも一緒に暮らしていました。ケチュアの人々は、末の子供が両親の面倒をみるのが慣例らしいのです。考えてみると合理的です。

上の子供達は自立して自分の家族を持っていく。そして、最後の子供が家庭を持ったら年老いた両親と一緒に暮らします。上の子供たちの家庭は、それを助けるようにする。何百年も続くケチュア族の知恵なのです。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

あなたは、先祖がどのように暮らしていたか
歴史的なことを知っていますか？

その人達は、どんなことを歓び
なにを悲しんだのでしょう。

数百年前の
先祖のことを想像してみてください

もしも話せたとしたら
なにを語りますか
そして
その人達から
何を言われそうですか？

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

アンデス編
その8

『牛が子猫のように甘える世界』

犬、鶏、アルパカ、豚、うさぎ、牛、ケチュア族の村には、動物がたくさんいました。まるで移動動物園です。さすがに、アルパカと牛は繋がれていましたが他の動物や鶏たちは放し飼いで勝手気ままに歩きまわっていました。その牛を使って農作業体験をさせてもらいました。

日本でも半世紀前にはどこでも牛や馬で畑を耕していましたが、いまでは見ることが出来ない風景です。牛二頭を使って大きな木製の鋤（すき：畑を浅く耕す道具）を引かせます。その引かせている鋤を人間が牛の後について支えます。牛に指示をしながらまっすぐに耕していくのです。「止まれ」「曲がれ」「進め」の3つの言葉だけで牛はコントロールされています。ちなみに進めは「オウ」です。

飼い主のラウルが牛を進ませている間中ずっと優しく小声で「オウ　オウ　オウ」と指示しているのが印象的でした。ラウルの奥さんナンシーも手伝いに来てくれました。そうすると、大きな角のある牛がナンシーに甘えるのです。顔を擦り付けてまるで幼児が甘えるようにです。その仕草から、牛が家族の一員として大切に愛情深く飼われていることが分かりました。

私の家には、ボーダーコリーがいます。幼いころに半年以上ドッグトレーニングを受けている犬で、「待て」「来い」「後へ」の3つの言葉を教え込まれています。でも「待て」と「来い」は得意ですが散歩のときの、「後へ」は、不得意です。すぐに私よりも前に出て引っ張ろうとするのです。「後へ！」と強く言ったらそのときは、後ろに下がるのですが数秒後には、前に出てしまいます。腹が立って散歩のたびに叱っていました。

ラウルが牛に鋤を引かせている間中、ずっと小声で「オウ、オウ、オウ」と囁いてコントロールする姿。ナンシーに擦り寄る牛の姿を観て我が家の犬のことを思い出していました。日本に帰ってから散歩中、ラウルのように小さな声でずっと「後へ、後へ、後へ」と指示してみました。その効果は絶大。動物は、いまに生きているのでずっと言い続けてあげることが大切だったのです。

今回の旅で一番、恩恵を受けたのは、我が家の犬かもしれません。

「最近、飼い主は、怒んなくなったな～。言うこともよく分かるしなんだか優しいぞ・・・」

なんて思っていることでしょう。お腹をだして喜ぶことが多くなりました。

ケチュア族が大切にすることは、動物も植物も家族の一員のように考える感性です。全てが繋がり循環している生き方です。

家族の協力、肥沃な土地、家畜との繋がり。彼らが何百年も守ってきたものです。

～～

子供の頃に
動物を飼っていましたか？
最近はどうですか？

あなたの動物との関係性を
見つめてみましょう

動物たちは、いまこの瞬間に
生きることを教えてくれます

彼らは、過去にも未来にも
生きていないのです

～～

アンデス編
その9

『アンデスの二人のシャーマン』

アンデスのケチュア族の村、２日目の夜に体験したのは、シャーマンによる『クレンジングの儀式』です。

クレンジングとは、身についたスピリチュアル的な悪い因子を取り除くものです。お祈り、アルコール、お香、火、物、歌などを使って浄化していきます。今回は、おばあちゃんシャーマンとおじいちゃんシャーマンがアンデスの別々の村から来てくれて私達に儀式を授けてくれました。

おばあちゃんシャーマンは、息子を二人。おじいちゃんシャーマンは、娘を一人、アシスタントに連れてきていました。おばあちゃんシャーマンは公民館に３人ずつ呼んで各組１時間位の儀式です。おじいちゃんシャーマンは村の奥にある洞窟で一人ずつ儀式を行いました。一回につき３０分以上かかっていたと思います。

このサン・クレメンテ村は標高３０００ｍです。最低気温は、１０度を切ります。夜はかなり冷え込みますが、そこで裸になって儀式を受けるというのです。

下着の着用はＯＫでした。でも、素っ裸のほうが効果があるとも聞かされました。どちらにせよ、寒くてガタガタ震えます。わたしは、３人一組のおばあちゃんシャーマンの方でした。他の男性２名と一緒です。

私たちは、効果があると言われた、産まれたままの姿になって儀式を受けました。以前、ハワイでヌーディストビーチに行ったことがあります。そのときにも感じましたが、パンツを脱ぐまでは恥ずかしいけど、一旦脱いでしまえば恥ずかしさはどこかに飛んでいってしまうのです。例えていうと露天風呂に入っているような感覚です。（女性陣のなかにも素っ裸で受けたひとがいたそうです。さすがアマゾンに行こうかという方たち、勇気があります）

準備ができた私たちは、裸で直立不動。なんだか可笑しくなってきます。そして、儀式が始まりました。部屋は暗くなっていて蝋燭の灯だけです。

そこから不思議な時間が進んでいきました。インド聖者の儀式、ハワイのシャーマンの儀式、オーストラリアのアボリジニの儀式、日本での古神道の儀式など、世界中でいろいろな儀式を受けてきましたが、それら全てに共通する不思議な時間を体験しました。

まず裸になった身体全身を、葉っぱでパタパタ叩かれます。悪霊をそれで叩き出しているのでしょうか？そして、アルコールを全身に吹きかけられます。全身の体温が奪われて、体の震えを止めることが出来ません。それを何度も繰り返します。その間、シャーマンは不思議なマントラを唱え続けます。それが何十分も続きます。

最後は、順番に仰向けに寝かされてシャーマンにひとりひとりチェックされます。ある人は、首に悪いものがついているので取ってあげると言われていました。実際にその方は、疲れると首に痛みが出てくるそうです。驚いたことに、シャーマンがこちょこちょっとなにかをしたら、その違和感がとれてしまったそうです。そして、その効果は日本に帰ってきても持続したそうです。

わたしも、チェックをしてもらいましたが簡単に「ＯＫ」と言われて、なにか大笑いされました。たぶん、「この子、ぜんぜん大丈夫だわ～」とか言われたのだと思います。

こうして不思議な第二夜は、終わり、そのまま深い眠りについたのでした。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

あなたは何か不思議な儀式に出たことはありますか？

いままでで参加したことがある儀式
あるいは、古くからある式典やお祭りなどを
思い出してみてください

それは、どんなものでしたか？

あなたは、それに対してどう感じましたか？

アンデス編
その10

『繋がりを感じるという生き方』

衝撃的なアンデスのシャーマン体験から一夜を明けて、村を出発する私たちのために、ケチュア族の人々が『見送りの宴』を開いてくれました。

村の広場に集まり真ん中にそれぞれの家庭で作った食べ物を置きます。スープ、芋、とうもろこし、豆、パン、ご飯、いろんなおかずを一品か二品を作って持ってきてくれました。それをみんなで頂きます。

ケチュア族の人々は、なにかあるといつもこうして集うそうです。まさにポットラックパーティー（一品持って集まる食事会）。最後は、ケチュア族のリーダーがスピーチをしてくれました。彼らが先祖から大切に守っていることはなんなのか？それについて語ってくれたのです。

「太陽と繋がり、大地と繋がる。家族と繋がり、コミュニティーと繋がる。動物と繋がり、植物と繋がる。全ての繋がりが重要だ」と語ります。そして、スピーチの最後に「人生でいちばん大切なことは、繋がりを感じることだ」と締めくくりました。

近年、欧米を中心に幸福学が研究されています。ヒトが幸せに暮らすには、どのような要因が必要なのかを調べる学問です。その研究の結果、富、地位、名誉以上に、幸せに関連が深かったのは、『リレーションシップ（関係性）』でした。

ケチュア族のすべてのものとの繋がりを感じるという生き方は、幸福学の研究結果と、とてもマッチします。私の中で、幸福学の結論と何百年と引き継がれた叡智が結びついた瞬間でした。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

あなたはなにと

繋がりを感じたいですか？

大地でしょうか

自然でしょうか
家族でしょうか

すべてのものは
すでに
あなたと繋がっています

繋がりを感じるという
意図が大切なんだと
ケチュア族のリーダーが
教えてくれました

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

いざアマゾン編
その１１

『最新鋭機でジャングル突入!!』

北極圏からチリの最南端までを結んでいる道路があります。全長４８０００キロあるパン・アメリカン・ハイウェイです。地球の外周が４万キロですのでそれを遥かに超える長さです。この長い道路は、１９２３年に構想されました。実は、そこから建設されたというよりは、既存の幹線道路を、結ぶようなかたちで出来ました。南北アメリカ大陸の１４カ国を通過する道路です。

私たちは、このパン・アメリカン・ハイウェイを利用してアマゾンへの玄関口であるプヨに移動しました。サン・クレメンテ村からバスにゆられて半日、３００キロほど南下したところです。

夕方にはプヨに到着し、ホテルに宿泊しました。

翌朝、ジャングルに向けてのフライトです。プヨの空港は、小さな空港で、待合室も２０名ぐらいが座れば満席になりそうなものでした。そこで、荷物の重量チェックをすませ離陸準備が整うのを待ちます。ここからは長靴に履き替えます。ジャングルでは、基本的に長靴での生活になります。熱帯雨林気候は、雨が多くて日に何度も雨が降ることがあります。そのため地面は、常にぬかるんでいるので、普通のスニーカーでは歩くことすら出来ません。素足か長靴、これがジャングルスタイルです。

飛行機は、ゾディアックという名前の１０人乗り飛行機と４人乗りのセスナ３機に、それぞれ分乗しました。私は、１０人乗りの飛行機です。この飛行機、思った以上に最新鋭でした。ＧＰＳナビゲーターがあり、カーナビの３Ｄマップのように立体的に地図が映し出されていました。

アマゾンの奥地に乗り込む飛行機は、オンボロで今にも墜落しそうなものを想像していましたが、それは「インディージョーンズ」などのアドベンチャー映画の刷り込みだったようです。

その最新鋭の機材をみて安心するのと同時に、ちょっと残念な気持ちもでてきました。これは、以前、タヒチに行ったときに感じたものと同じ種類のものでした。タヒチでは、車が多く、渋滞していたのです。それをみて、南海の孤島でのんびり暮らす島民をイメージしていた私はとても残念に思いました。文明からはなれた場所を想像していたのに意外にも世界のどこでも観られる光景がそこにあった・・・そんな、そこはかとない感覚です。これも、南海の孤島はかくあるべしという思い込みから感じたことです。

今回の旅は、このような思い込みを何度も書き直すようなことが起こりました。私たちは、テレビや映画を観て、既に知っているとか、こうであろうと思いがちです。テレビや映画は、製作者によって加工されたり編集されたりしているので、実際に行ってみた時の印象と大きく違うことがあります。

実際に行ってみて体験する。とても大切なことです。

さあ、いよいよ飛行機は離陸します。未知の領域へ突入です。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

期待していたのに
期待通りでなかったことは
どんなことがありましたか？

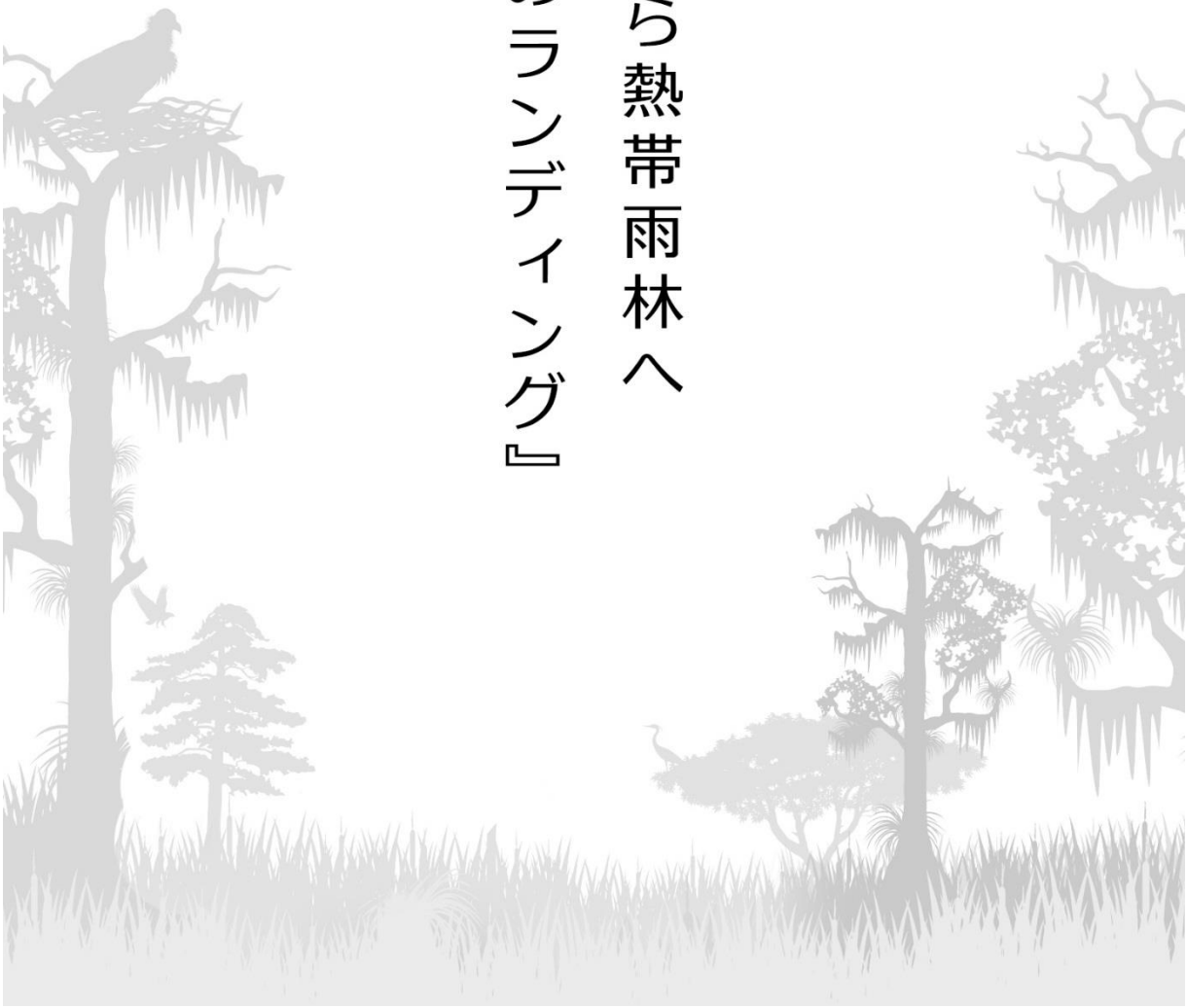
それは、なぜそう感じたのでしょう

期待するには
なにか事前の情報があったはずです
それはどこからもらったものでしたか？

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

いざアマゾン編
その12

『雲霧林から熱帯雨林へ
泥の中へのランディング』



プヨの空港を離陸すると、そこは雲霧林（うんむりん）と呼ばれる森が広がります。雲霧林は、熱帯・亜熱帯地方の山岳地独特の森で、暑いうえに山で湿気が阻まれ、霧がつねに発生するような場所に自生します。低い広葉樹が広がりコケやシダが群生するような森です。日本では、小笠原諸島や屋久島などにあるそうです。

１０分ほど飛ぶと、がらりと植物相が変わりました。そこからは、完全な熱帯雨林の森が広がります。高い木、中くらいの木、低い木それらが織りなすまるで緑の絨毯のような模様。全く人の手が入っていない原始のままの森です。それが見渡す限り続きます。

この緑が南米大陸の東端まで、何千キロも続くと思うと自分がこれから超巨大な緑の生物の中に飲み込まれていくような感覚になりました。ジャングルを人間サイズに縮めてみたら、私たちは腸内細菌レベルになるでしょう。私たちはジャングルにとって、善玉菌でしょうか？悪玉菌なのでしょうか？

そんなことを考えていたら、アマゾン川が観えてきました。写真でよく見るヘビのように右に左にうねった川です。

なぜアマゾン川は、くねくね曲がっていると思いますか？それは、大地に高低差がないからです。日本のように、山から平地になり海に注ぐのなら、高低差があり一直線に川が海に流れていきます。しかし、南米大陸はあまりに広大なのです。アンデス山脈が背骨のように大陸の西端にありますが、そこから大陸をまたぎ東端（大西洋）までほぼ真っ平らです。その大きさはオーストラリア大陸に匹敵します。そのためアマゾン川は蛇行するのです。

また、アマゾン川の総水量は、この地球上のすべての川を合わせたものの２５％の量になります。さらに河口部分の幅は、５００キロだと言われています。これは東京から大阪までの距離です。まさに想像を絶する川なのです。

小型機がフライトを始めて1時間で、いよいよランディングです。滑走路が観えてきました。その滑走路は森を切り開いた広場です。地面は、赤茶けた土。前日、雨が沢山降っていたので所々、泥になっていました。

そこに、突っ込むように飛行機は着陸していきました。フライト前に、あまりに泥が多いと着陸できないことがあると伝えられていました。パイロットの経験と勘でランディングするかどうかを決めるのでしょう。幸い機長は、ベテランで泥の滑走路に難なくランディングさせました。

しかし、ここでハプニングがありました。助手席に座っていた記録映画のカメラマンがランディングした時の私達の表情を撮ろうとカメラを向けた瞬間、助手席側のドアが全開になりました。身体を捻ったときに肘があたり扉のロックが外れてしまったのです。大量の泥が飛行機の中に飛び込んできました。

飛行機は、無事にストップしましたが一歩間違えたら大惨事でした。飛行機が完全にストップしたときに状況が分かり、みんな大笑いです。

飛行機を降りると現地のアチュアル族の人々が寄ってきました。特に子どもたちが喜んで集まってきます。みんなTシャツに短パン。男性は長靴。女性と子供は素足の人が多かったのです。また、裸の子供は、数名いましたが子供の多くはちゃんと洋服を着用していました。みんな目がキラキラしていて好奇心旺盛って感じでした。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

あなたがこれまで見た
壮大な風景は
どんなものですか？

それは、いつ、誰と見たものですか？

地球はときに
壮大なパノラマを見せてくれます
自然の偉大さをみせてくれるのです

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

いざアマゾン編
その13

『生きることに
まったく心配のない生活』

アマゾンの奥地に飛行機で着陸して最初に向かった先は先住民族の若夫婦のお家でした。
壁のない家の真ん中に若者が、やりを持って座っていました。家の主である男性が、武器を携えて円座の真ん中に座って招くというのがこの部族の風習なのです。

そして、みんなが席に座った瞬間に器が配られました。どんぶり茶碗みたいな大きさです。そこに、若奥さんがひとりずつ飲み物を注いでくれました。チチャという飲み物で乳白色の甘酒のような見た目です。この製法が独特です。

古代の日本などでも用いられていた製法で女性が米や芋を口に入れて噛み吐き出したものを貯め発酵させて造る「口噛み酒」という手法です。アマゾンではユカとよばれる芋を噛んで造っていきます。毎日3時間ぐらいかけて貯めていくそうです。
そうして、発酵してアルコール分が出来てきたときが飲み頃になります。アチュアル族の人々はこのチチャだけで暮らしていけるそうです。お水も呑まなくてこのチチャだけを飲んでいるそうです。

そして、このチチャは女性しか作ることを許されていません。男性は、週二回、鳥を捕まえたり、魚を釣ったりしてタンパク源を森や河に取りに行くのが仕事です。

このように完全分業して生活しているのがアチュアル族の生き方なのです。彼らは、基本的にチチャさえあれば生きることが出来ます。そしてユカは、茎を植えるだけで自生していく生命力の強い作物です。森で沢山育つので飢えるという心配がありません。
食べ物も、住むところも、着るものも、森から自由に手に入ります。そのため、アチュアル族には何かが欠乏するという観念が発達しなかったのです。彼らが必要とするものは、森に入れば自由に手にはいるので、独り占めするという観念も発達しませんでした。

アチュアル族の生活は、生きるという意味において全く心配のいらない世界だったのです。

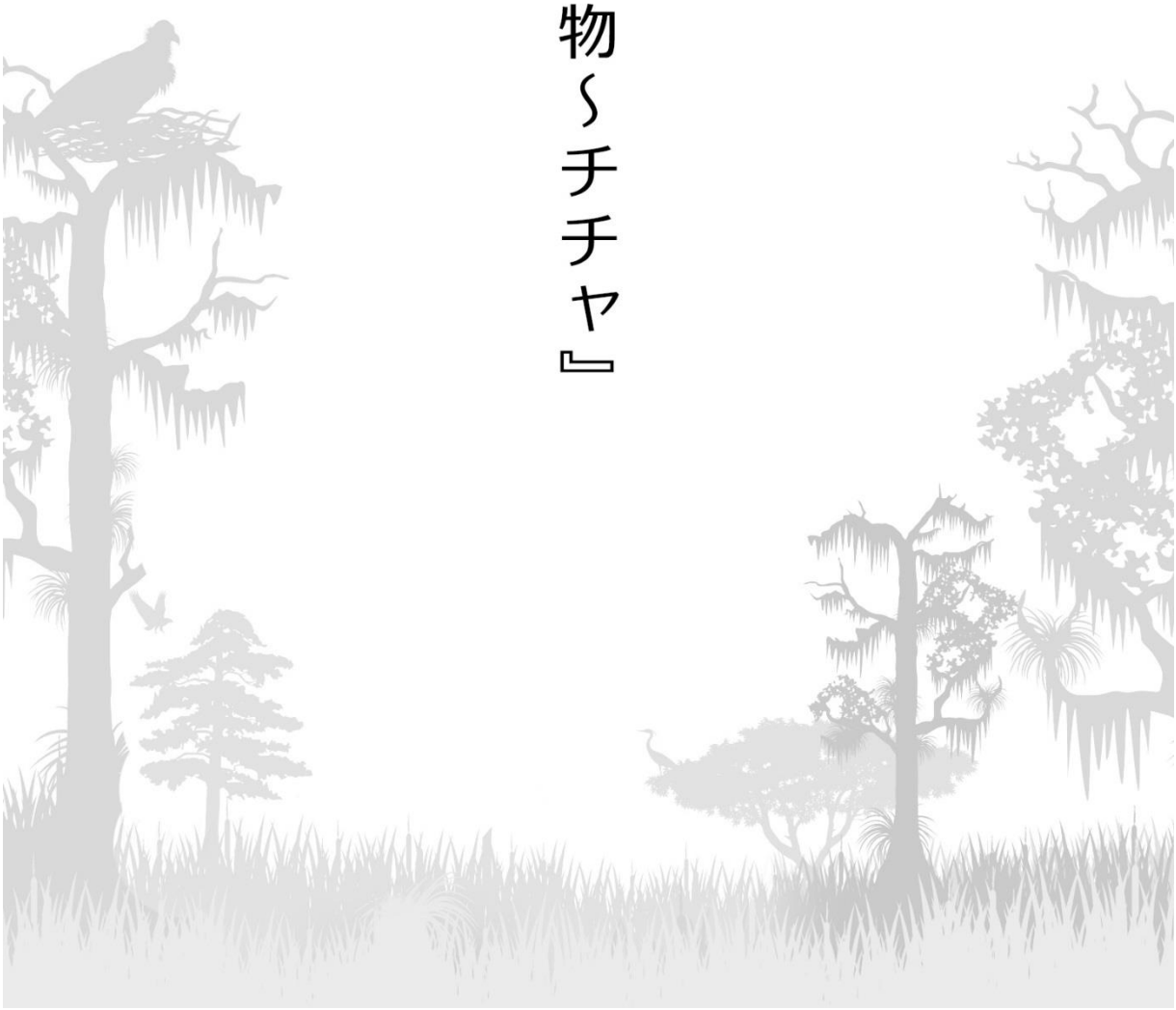
もしも、
食事も
住むところも
衣類も
心配ないとしたら
あなたは、どんな気分で
生活していると思いますか？

アチュアル族の
気分を味わってみましょう

なにをやっても
衣食住の心配を一生涯しないで
よかったとしたら
どんな生き方になるのでしょう

いざアマゾン編
その14

『命の飲み物～チチャ』



前述したようにチチャは、アチュアル族にとって命の飲み物です。その家の女性が、ユカ（芋）を口で噛み吐き出して貯めていくものです。ただ、私達が初めてチチャを飲むときにこの噛んで吐き出して貯めるというのを想像してしまうと少々、厄介です。

できるだけ考えないようにしながら意を決して飲んでみました。

味は、少し酸っぱい感じがありますが飲みやすいものでした。芋の繊維がのこっているので、喉越し的には、まさに甘酒です。あるいは白粥とも言えます。

なかなかイケると思いながらも同時に、「お腹、壊さないかな～」という思いが脳裏をよぎりました。結局、翌日になっても誰もお腹をこわす人もいなくて、これはまったくの取り越し苦労でした。

また、このときガイドのダニエルから面白いことを聞きました。同じ原材料のユカを使っても、噛む女性によって味が違ってくるそうです。まるでぬか床のようです。

さらに、チチャを飲み干すとすぐにお代わりを入れてくれます。うっかり、一気飲みをするとまた初めからやりなおしです。ダニエルは慣れているので何杯もお代わりを飲んでいました。私は、さすがに一杯にしておきました。

まだアマゾン体験は始まったばかりなのです。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

あなたが、過去に
意を決してやったことはなんですか？

なにかを
初めて体験するときには
勇気がいります

意を決して一歩、踏み出してみる
この一歩が多ければ多いほど
ユニークな人生になります

いざアマゾン編
その15

『生涯をかけたミッション』

アチュアル族は半世紀前まで一夫多妻制でした。

部族間での殺し合いがあり、男性が殺されて残された女性と子供は引き取られていきます（奪われていく）。殺された側は、ある時点で誰かが仕返しをしにいきます。そして、奪った側の男性を殺し、また女性や子供を奪っていきます。

これがずっと続きます。このようなやり合いの結果、強い男だけが残ることになります。そして、女性と子供が多い状態になるわけです。強い男のＤＮＡが部族に残り血が濃くなることもなかったわけです。現代の私たちには理解し難いものですが、考えてみると数百年前の日本では、切腹が武士の誉れという文化がありました。ある一面だけの価値観では、判断できないこともあります。

一家に女性が何人かいることは生活効率も良かったそうです。一人は子供を看て、一人はチチャをつくるなど分業することができたからです。このように一夫多妻制には実務的なメリットもありました。

現代は殺し合いがなくなり、一夫一妻制のカップルも多くなったそうです。この殺し合いがなくなった切っ掛けは、あるイタリア人宣教師の存在がありました。その宣教師は、先住民と同じような生活をしながら何十年もかけて殺し合いを止めたのです。先住民族の殺し合いを止めることが彼の生涯のミッションになりました。

ガイドのダニエルはその伝説の宣教師に会いに行ったことがあるそうです。その時、その宣教師はかなりの高齢になっていました。宣教師はダニエルに、部族のために医師団を迎えられないか頼みました。ダニエルは、各方面に援助を願い出て医師団を募りました。特に眼科医が必要だったそうです。

そのダニエルのミッションが達成されたとき、宣教師は亡くなりました。彼の先住民族への強い想いがダニエルに引き継がれていったのでした。

あなたの生涯のミッションはなんですか？

もしあるとしたら
それはなに

あるいは、
誰かから託されたとしたら
どんなことがありそうですか？

直感的に答えてみてください

アマゾン編
その16

『ジャングルウォーク』

チチャを振る舞ってくれた若夫婦のお家を後にしてジャングルに入っていきます。

ここからは、湿地帯。飛行機に乗る前に履き替えていた長靴が威力を発揮します。

熱帯雨林気候のジャングルは多くの場所がぬかるんでいます。足を取られると簡単に膝まで入ってしまうようなところもありました。

大きな木が倒れている上を越えたり、下をくぐったり。それらの木には、アリが沢山歩いてることもあるので、うっかり触るわけにもいきません。ぬかるみを渡るために枝を置いてくれていたりするのですが、それがよく滑ります。

そんなわけで、最初はみんなゆっくりとしか進むことが出来ませんでした。頭上にある木々を見上げることもなく、ただひたすら足場を確かめながら進みます。そのことを見越して先住民のガイドは木の枝で作った杖を用意してくれていました。それがどれほど役に立ったことか。

何度も転びそうになるところを杖のお陰で助かりました。こうして初めてのジャングルを長時間、歩いたのです。そうして、ようやく川に到着しました。そこからは、丸太をくり抜いた細長い船で移動です。私たちは二列になって乗り込みました。これがこの上なく不安定なのです。写真を撮ろうと手を出すだけで船が傾きます。それをバランスを取りながら走るのです。もし一斉にみんなが片側に手を出したら船は簡単に転覆するかと思うぐらい不安定な船だったのです。

アマゾン川は、流れが穏やかで湖のような状態です。それだからこそ通用する船なのでしょう。その船で長い時間移動しました。移動中に目を凝らして、対岸を観ていましたが、ワニやアナコンダのようなものは、発見することが出来ませんでした。緑が延々と続きます。川の中も水が濁っているので、何がいるのか分からない状態でした。

ジャングルの中で何度も思ったことです。ここは圧倒的に植物が強い場所。絶対的な『緑の王国』だと。

今までの人生で一番長く
歩いたのは
どんな時ですか？

それは、誰と
どんなシチュエーションだったのでしょう？

歩くことで
身体や自然を感じることが
できます

足は第二の心臓と
呼ばれているのです

アマゾン編
その17

『宿泊先は、高床式住居』

上陸しやすいようにジャングルを切り開いたスペースがありました。そこから陸に上がり船を後にします。先程よりもさらに湿地も深い森の中を歩いていきます。途中にはツタ、シダ、灌木、巨木、さまざまなものが生い茂っています。前の人に遅れないようにしながらもぬかるみに足を取られないように注意しながら歩きます。

杖はさきほど船に乗る前に捨ててしまっていたので二本足の自力で支えないといけません。途中で先住民の人たちが私達を抜いていきました。彼らは私達の食料や荷物を運んでくれていたのです。彼らの歩く速さは私達の倍以上。女性や子供ですら、飛ぶように歩きます。彼らの姿を間近で見ることによって、徐々に私達もジャングルウォークに慣れていきました。

こうして、いつ果てるともわからない湿地を抜けた後、急に視界がひらけました。到着です。

アチュアル族が彼らの村の外れに建てた外部からの人を迎えるための施設「ティンカスロッジ」です。これから、ここに4泊します。

そこには、高床式の建物が建てられていました。全部、茅葺屋根です。高床式になっているのは湿気、暑さ、そして害虫や毒蛇から守るためでしょう。コテージ風のものが5～6個、食事をするための大きめのコテージが1つ、また、集会をするための高床になっていなくて地面に柱と屋根だけというのもありました。

高床式になっているものは、すべて渡り廊下でつながっていました。私たちはドロドロになった長靴を脱いでそれぞれに割り当てられた場所に荷物をおろします。

そこには、木製のベッド台、キャンプ用のマット、枕、毛布が、置かれていました。また、ベッド台には一人用の蚊帳がかけられていました。

ジャングルは、蚊がたくさんいます。蚊帳なしでは眠ることは出来なかったでしょう。この宿泊地の周りは蚊が嫌う香りを出す木を植えていて、比較的、蚊が少なくなっていました。それでも、蚊帳は必要でした。なにしろ、そのコテージは壁もなにもないまったくのオープンエアーな状態だったからです。

そう、アチュアル族の提供してくれた宿泊所は、彼らの家と同じ作りの、壁のない家だったのです。まさに、自然と一体化できる高床式の住居だったのです。

外で夜に眠った体験はありますか？

テント
車中泊
野宿

その時のことを
思い出してみましょう

少しの風のうごきで目が覚めたり
鳥や小動物の鳴き声で
びっくりしたり

あなたは、その時
なにを感じていましたか？
それは、いつのことでしょう

アマゾン編
その18

『ジャングルの夜明け』

ティンカスロッジのトイレは、基本は森です。でも一つだけ洋式トイレがありました。しかも、水洗です。ただし、水を流し終えたら隣に雨水を貯めている大きな瓶がありバケツでそこから水をすくって水洗トイレのタンクに足しておきます。手動式の水洗便所です。

ちなみに、トイレは紙を便器に流すことはしません。環境を考えてのことです。トイレの片隅に紙入れがあり、そこに捨てます。私は、インドに長期滞在したときにお尻を拭いた紙を紙入れに捨てるというスタイルには慣れていました。ただこのスタイルに、はじめて触れる人にとっては、カルチャーショックでしょう。慣れるまで時間がかかったと思います。

シャワーは、お水がたくさん出ました。お湯は出ません。また、界面活性剤入りのシャンプーは持ち込み禁止です。オーガニック石鹸の利用を薦められました。電灯はありません。暗くなったあとの、シャワーやトイレは、各自が持ってきたヘッドライトの灯りが頼りになります。

そうこうしていると、先住民の男性チームが夕食をつくってくれました。野菜、スープ、芋、など、私たちの口にあわせたものです。このティンカスロッジに滞在中、ずっと彼らが食事を作ってくれました。アマゾンの奥地とは思えないほどの野菜やご飯を使っての料理を提供してくれたのです。

夕飯の後は、蚊帳の中でキャンプ用マットに横になりました。夜にどんな虫や生物が出てくるか分からないので、念のため森で着ていた服のままで眠ることにしました。例のナノテクノロジーを用いた防虫用の上着とタイツです。ある意味、完全防御。これさえ着ていたら蚊やダニなど虫の心配をする必要がないと思いました。

こうして、ジャングルの初日が終了しました。初めてのジャングルウォークで、疲れ切っていた私は、すぐに深い眠りに入っていきました。

翌朝、辺りが明るくなり始めると、一斉に鳥や動物たちが鳴き出しました。まるでシンフォニーのようです。サイレンのような声でなく鳥、雄叫びを上げる猿、例えようのない音を発する何か。夜が明けて今日も一日、新しい命として活動できる歓びを表しているようでした。

私は蚊帳の中でまどろみながらそのシンフォニーを聞いていました。あらためてジャングルの真っ只中に存在していることが実感できるひとときです。野生の鳥や動物達が何千年何万年も変わらずに暮らしている場所それがジャングルです。完全なる自然の調和、日本で暮らす私達がいちばん求めているものかもしれません。

２１世紀の後半は”ひとの快適さと永続する自然との調和”これが人類全体のテーマになってくるでしょう。アマゾンの先住民が与えてくれた「ティンカスロッジ」は、それを考えさせてもらえる特別な場所です。地球の息吹をダイレクトに感じさせてくれる場所なのです。

いままで一番清々しい朝は
どんなときだったでしょう
どんなシチュエーションで
目覚めたときですか？
どうしてそう感じれたのか？
前夜のことも思い出してみましょう

アマゾン編
その19

『アチュアル族の村訪問』

先住民の人々は日の出とともに動き出します。当たり前ですが、彼らは時計を持っていません。太陽とともに起きて太陽とともに眠る、そんなリズムで彼らは生きてきました。

私たちは午前中をのんびりと過ごし、ジャングルの環境に身体とこころを慣らしていきました。シャワーを浴びたり荷物の整理をしたりベッドと蚊帳を整えたりします。

午後からはまたジャングルウォークです。アチュアル族の村にいよいよ入っていきます。私達が泊まっているティンカスロッジから３０分ぐらい歩いたところにアチュアル族が住んでいるエリアがあります。茅葺屋根で壁のない家がたくさん現れてきました。集落の中心は、広く森が切り開かれていて学校の校庭みたいになっていました。

私たちは大きな茅葺き屋根の集会場に通されました。それにも、もちろん壁はありません。村人が沢山集まってきました。大人や子供を併せると４０～５０人は、いたでしょうか。

子どもたちは物珍しげに視線を向けています。みんなＴシャツを着ています。５０年前にイタリア人の宣教師が来て服を着ることを教えたそうです。こうして、アチュアル族との交流会が始まりました。

最初は、この村のリーダーが挨拶をしてくれました。私達も自己紹介をします。そのあとは、例のチチャです。みんなに振る舞われたのでした。私は、二杯、チチャをいただきました。だんだん慣れてきました。

子どもたちが、私たちの顔にペインティングをしてくれました。男の人には男の子が、女の人には女の子が。異性に肌を触らせることは、ここではご法度なのです。男性が不必要に女性を見ることも嫌がられます。女性は部族の中で大切にされていました。

子どもたちのフェイスペンディングが終わると、男性二人が部族間の戦いの前にする口上を披露してくれました。お互いに武器（ライフル）を持ちながら対座します。日本の戦国武将が戦いの前に名乗り合ったような感じです。「やあやあ、われこそは河内の国の住人、吉川仁左衛門なり畏くもわが君の勅命により、敵を征伐するためにここに参った・・・」というようなものです。

アチュアル族のこの口上は、１０分以上続きました。なにを言っているのかは分かりませんが、現在は子どもたちの将来を語り合う儀式的なものとなっているそうです。

次は音楽です。女性がひとりで歌う歌、まるで民謡のようでした。そして、５名で歌う歌は、「はないちもんめ」です。互いに手を繋いで左右に動きながら歌います。

最後は男性の笛の演奏。これも、完全に日本の伝統的な横笛である「篠笛（しのぶえ）」でした。音色もそっくりで、かすれたような笛の音です。さらに、かごの編み方、紐の創り方なども見せてもらいました。

アチュアルの人々が見せてくれたものは太古の日本で日常的にあったものとそっくりだったのです。

私たちは、彼らにお礼として、書道のパフォーマンス、踊り、合唱をしました。合唱は、「故郷（ふるさと）」を漢字を見せながら歌いました。歌が終わってから、彼らは興味深そうに漢字の書かれた半紙を触っていました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

もし、先住民にあなたのことを
自己紹介するとしたら
どんなことを話しますか？

彼らにわかるように話すとすると

どうなるでしょう？

彼らは、会社も知りませんし
工場も知りません

あなたは、なにをする人と
言ったらいいですか

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

アマゾン編
その20

『いまのアチュアル族とお金の関係性』

お互いの文化を見せあった後、みんなで外に出ました。
外と言ってもそもそも壁がないので屋根のない空の下です。広場に、大きな葉っぱを敷き詰めます。その上に、アチュアル族の民芸品が置かれていきました。
彼らが作ったブレスレット、ネックレス、器、置物などです。ガイドのダニエルから「言い値で買ってあげてください」とお願いされました。
彼らが提示する１０ドル、２０ドル、３０ドルという言葉のままモノとお金（ドル）を交換します。数十年前まで一切お金という概念のない人々です。値引きなど駆け引きということを知りません。そのお金がかれらの衣類、医療、教育に使われます。

このようなジャングルの真っ只中で子供が毒蛇に噛まれたら街の病院に空輸するしかないのです。それには、費用がかかります。彼らは基本的な生活を営むうえではお金は掛かりませんが、こちら側の世界のことを知ってしまいました。彼らの生活様式も影響をうけてきているのです。なかには教育を受けて町の生活を始める人もいます。また、町と村を行き来する人も出てきています。
実際に、村人の何人かは携帯電話を持っていました。もちろん、電波は村まで届いていませんが写真機能や録音機能を使ったりしていました。これが、どんな風に彼ら部族全体の方向性に影響するのか分かりませんが確実に融合が進んでいます。この流れを止めることは出来ないでしょう。

最悪のシナリオは、彼らの生活にテクノロジーが無制限に入ってしまい、森が開発され、地下資源が採掘され、便利な生活と少しのお金は手に入るが、気がついたら森が死んでいたというストーリーです（これは、私たちのストーリですね。５０年前の日本には、自然が沢山ありました。街の真ん中でもザリガニやカタツムリが沢山いたのです）。

いま年間４万種以上の生物種がこの惑星から無くなっていってます。世界中のジャングルが開発されているので絶滅に拍車がかかっています。地球上には、命名されているだけでも２００万種の種があり、実際には、その数倍から数十倍あると言われているにしても、加速度的に生物種が無くなっているのは事実です。

アマゾンのジャングル。ここが永続するように人類はそのすべてを掛けても守っていかなければなりません。その一つの象徴しして、アチュアル族の今後があるでしょう。なぜなら、彼らのテリトリーには、アマゾン川の源流があるからです。

あなたの身の回りで
子供の頃見たけれど
最近みなくなった
動植物はなんですか？

逆に、見かけるようになった
動植物は？

見かける頻度は
変わりましたか

あなたは、いま、
どんな風に周りの環境を
感じているのでしょう

夢見編
その21

『夢を読み解く種族』

アチュアル族の人々は、顔立ちが日本人そっくりです。私達と見分けがつかないぐらいです。子どもたちも、日本のどこかの街角にいそうな顔をしています。

数千年～数万年前に、日本人の祖先と同じような人々が、ベーリング海峡を越えて北米大陸に渡り、南米大陸に移動してアマゾンに根付いたのかもしれません。そんな風に想像してしまうぐらい、彼らの顔立ちや体つきは、私達と変わらないのです。

アチュアル族との文化交流後、彼らから私たちに夕食が配られました。蒸した魚とバナナでした。塩が添えられていて、それとともに魚を食べると、まるで鮎の塩焼きのような味になります。また、そのころには太陽が沈み、辺りは真っ暗になりました。すぐ隣の小川では、ホタルが光っています。日本のホタルよりも激しくて、まるでフラッシュライトのようにバチバチ光っていました。

私たちは食事を終え、彼らに別れを言って帰路につきました。

帰りは真っ暗なジャングルです。ヘッドライトがなければ、鼻を摘まれても分からないぐらいの闇夜です。前の人から逸れないように、足早にジャングルを歩きます。こうして、３０分、ティンカスロッジに帰り着きました。すぐに、ベッドを整えて、眠りにつきました。森のなかでは、よく眠れるのです。

アチュアル族は、夢を大切にしながら暮らしています。逆に現実の世界が夢だと思っているぐらいにです。彼らの大切な日課のひとつは、朝起きたらユアサというお茶を飲み夢の話をすることです。部族で夢を共有するのです。そして、部族長やシャーマンが夢からメッセージを読み解きます。大切な決断は、全て夢によってなされるのです。

あるとき、シャーマンが悪い夢を見ました。その夢の出処を探っていくと、どうやら村の外部で、なにやら悪いことが起こっているというメッセージだったそうです。そこで、周りの部族を調べてみました。すると、森林資源や地下資源を目当てにした外部の人種がいることがわかりました。

彼らは、お金というものと交換して、土地を奪われてしまった部族を目の当たりにしました。部族長やシャーマンは外部の助けが必要なことを知りました。１９９０年代半ばのことです。そこから、リン・ツイスト達を引き寄せ、リン達のアチュアル族保護活動が始まったのです。

部族の選ばれた若者が、リン達のサポートにより、アメリカに渡りました。英語を習い、お金のある生活、私たちの文化に触れていきました。森には値札は存在しません。しかし、こちら側の世界は、全てに値段がついています。彼は、夢も希望も人生の展望も恋も結婚も、ありとあらゆるものがお金に左右される様を見ていったのです。

こうして、アチュアル族と私たちの社会が出会っていきました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

あなたは、はっきりとした夢を
みたことがありますか？
明晰夢というものです

子供の頃は、どうだったでしょう？
夢をよく見た方ですか
見なかった方ですか

最近
印象に残った夢は？

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

夢見編
その22

『ジャングルにいないもの』

翌日は、ジャングルを歩く日でした。先頭をアチュアル族の男性がガイドしてくれます。最後尾はダニエルがカバーしてくれるので安心です。私達もかなりジャングルウォークに慣れてきて、湿地を楽に歩けるようになっていました。

このとき、あることに気が付きました。それは、あるものが居ないということにです。絶対、ジャングルのなかに沢山いて怖いと想っていたもの。対策までしてきたもの、それは、

「動物」です。

ジャングルを数日間歩いていて、なにか違和感を感じていました。ここまで一切、動物に遭遇していなかったのです。痕跡すら見ることが出来ません。これはどういうことでしょうか？

ダニエルに聞いてみました。「どうして動物がいないのか？」答えは、驚くべきものでした。それは、アマゾンのジャングルでは、９０％の植物に毒素が含まれていて、草食動物が食べることができない。だから、大型の草食動物が繁殖しにくいというのです。草食動物が少ないということは、それを食べる肉食獣も育ちません、そのためジャングルの中では、ほとんど動物を見かけないのだということだったのです。

年中、森をガイドしているダニエルですら、ジャングルの中で最強の肉食獣であるジャガーに遭遇したのは生涯で二度だけだったそうです。それもかなり離れた場所でです。

さらに、ダニエルは言います。このアマゾンの地面は、サハラ砂漠に次いで二番目に痩せた土地だと。栄養分がないので、植物は、根っこを空中に垂らせたり、扇のように地面から盛り上がらせたりして、少しでも栄養分を補おうとしていると言います。

サハラ砂漠に次いで二番目に痩せた土地というのは、オーバーじゃないかと思いました。なぜなら、これだけの緑があり、落ち葉などで栄養素が地面に蓄積されると思ったからです。でも、地表に落ちた葉は、すぐにシロアリに食べられて分解されてしまう。虫達は太るが、地面は痩せたままだというのです。

動物が沢山いるジャングルは、テレビや映画で植え付けられた幻想でした。もしかしたら、アフリカのジャングルや、東南アジアのジャングルは、動物の宝庫かもしれません。しかし、アマゾン（このエリアだけかもしれませんが）では、本当に動物を見ることが出来なかったのです。

実際に体験してみないと分からないことがあります。現地に行って自分の目で確かめないとわからないことです。森にいるのは、虫、鳥、ヘビ、ワニ、小型のさる達。大型の哺乳類は極めて少数派だったなんて。

ジャングルは圧倒的な緑と虫の王国だったのです。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

最近
体験してみて
気づいたことは
なんですか？

この世界には、体験してみないと
わからないことが沢山あります

体験はいつも驚きに満ちています

この世に生をうけた
一つの意味は
様々なことを
体験をすることなのです

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

夢見編
その23

『驚くべきシャーマンの世界』

この日は、明け方の4時に起きました。そこから儀式が始まりました。その夜にある、メインの儀式のための準備に当たる儀式です。方法は、いたって簡単で、ユアサというお茶を、何杯も飲みます。この薄味のお茶を飲めるだけ飲み、お腹をお茶で満タンにしてから、それを吐き出します。

広場の横に穴が掘ってあり、そこまで走っていって嘔吐します。お腹がパンパンになっているので、指を喉に少し突っ込むだけで、簡単にお茶は逆流してきます。こうして胃の中のものを、全て洗い流すのです。アチュアル族は、日常的にこの胃洗浄をおこなっているそうです。

さらに、この日は、食事を抜きます。その絶食状態で、たくさん活動するようにと言われました。身体が疲れていたほうが、夜のメインの儀式で意識に繋がりやすくなるそうです。そのため、わざと長時間ジャングルを歩いて、大雨の中をボートに乗り、カヌーを漕いで、へとへとになるまで活動しました。

この日は、もう一つ注意事項がありました。夜の儀式のために質問を用意しておくということでした。自分の人生にとって、いちばん大切な質問をつくっておきます。そして、それを忘れないように、何度も何度も意図しておくようにと指示がありました。

私は、「より自分らしく生きるために必要なことは？」という質問を用意しました。このとき、答えを得ないで、ただ問いかけるところでストップさせることがコツです。ガイドのダニエルが、旅の最初の段階から、そのことに関して説明してくれていました。「答えを出さないで、何度も何度も質問を意図する、その問いかけた状態で置いておくことが大切なんだ」って。

私たちは、疲れきってロッジに戻って来た後、日がとっぷり暮れるまで、思い思いの場所で待ちます。私はお気に入りのハンモックで揺られながら時が満ちるのを待ちました。

夜の儀式が始まりました。周りの空気感が変わっていくのが分かりました。

シャーマンを中心に儀式は進行していきます。シャーマンは、わざわざ8時間も歩いて私達のために来てくれたそうです。現地でも、とても尊敬されているシャーマンで、彼のガイドによる、「ヴィジョンを受け取る儀式」です。

はじまってすぐに、シャーマンが創り出すパワフルな夢見の状態へと導かれていきました。そのチカラは圧倒的でした。しばらくたった後、顕在的な意識が緩んでいって、広大でクリアーな意識に繋がりだしたのです。そこでは、すべてが見渡せました。

用意していた質問の答えも一瞬で得られます。まるで頭のなかにスーパーコンピューターがあるかのようでした。質問したと思ったら、瞬時に答えが出現するのです。それも、圧倒的なデータ量で。言葉というよりも、答えそのものの要素が瞬間的に塊で出てくるという印象です。

用意していた質問以外にも幾つか問いかけましたが、覚えておくことが難しい状態でした。ダニエルが繰り返し意図が大切だと、言ってくれていた意味がわかりました。夢から覚めたら、夢の内容をすぐに忘れてしまうのと同じ原理でしょう。ちゃんと準備していたもの以外の答えは残りにくいのです。

かろうじて覚えていたのは、宇宙のビジョンでした。木星、土星、宇宙のはて。そこに連れて行ってとお願いしたら、瞬時にその場面が展開しました。頭のなかで創り出した映像なのですが、まるでそこに行っているかのように鮮明でした。数十年後に実際に惑星間旅行に行けたとしたら、この時観たヴィジョンと同じものを観るかもしれません。

その後、遠くで音楽（シャーマンの口笛？歌？）が聞こえてきて、夢見の状態から覚めていきました。足元がフラフラしながら、自分のベッドに戻り、そのまま横になりました。眠ったり起きたりを繰り返して、ゆっくりと夜明けを迎えたのでした。

翌朝、シャーマンは夢（ヴィジョン）の読み解きをしてくれました。私の場合は、シンプルにそれが答えだということで、分かりやすい読み解きでした。ただ、それは、あまり口外しないで自分のなかで熟成させるようにとガイドをもらいました。

他の人達も、ヴィジョンを見たひと、ヴィジョンを見なかったひと様々でした。概して、絶対に観たいと強く願っていたひとほど、ヴィジョンを得れなかったようです。ゆるいグリップで委ねるようにしていた人は、様々なヴィジョンを楽しめていました。

人のこころは、不思議な構造になっています。思考するレベルの下には、ものすごく賢い部分があることが分かりました。そして、普段はそこにアクセスできないにしても、バックグラウンドで機能していて、様々なガイドをしてくれていると確信できるようになったのです。

こうして、アマゾンのシャーマンの儀式も終わりました。ジャングルの奥地だからこそ、入れた世界なのでしょう。この後、私たちは、シャーマンと別れて、ティンカスロッジを後にしたのです。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

なんでも答えがわかるとしたら
何を聞きますか？

質問は一つだけです

あなたは、なにを知りたいのでしょう

人生の目的？
ソウルメイトの名前？
宇宙の真理？

一体なに聞きますか

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

夢見編
その24

『親密感と分離感』

次はカパウイロッジに移動です。8時間、細長い船に乗って移動します。途中に大雨が降ったり、エンジントラブルがあったりしましたが、移りゆくアマゾン川を観ているだけで、時間が過ぎていきました。長いはずの8時間の行程が、不思議にあっという間に感じられたのは、まだ昨日のシャーマンのチカラが及んでいたのかもしれません。

カパウイロッジに着いたときには、日没ギリギリでした。そこは、とても美しいリゾート用のコテージでした。昨日までのティンカスロッジは、先住民が住む家と同じ作りで、壁がない高床式の簡素なものでした。一方のカパウイロッジは、現代的な美しいロッジです。壁があり、シャワーやトイレも部屋のなかにありました。それなのに、部屋に入った途端、強烈な孤独を感じました。

ティンカスロッジでは、目を覚ましたときも、どんなときでも、誰かがそばにいるのが肌感覚で感じられたのです。男性も女性も、目の届く範囲で、そこにいるのがわかります。繋がっている感覚です。でも、カパウイロッジに移って壁一枚隔てられただけで、強く分離感を感じたのです。

子供の頃、世界と自分が隔絶されて存在すると気がついた、あの時の寂しさに似ています。アチュアル族が提供してくれた壁のない住居は、たった4日間の滞在だったのに、大きく私の精神に影響を与えていたのです。

私たちは、そのロッジに2泊してから、ジャングルを出ました。現代社会への帰還です。考えたら、アマゾンの最深部から直接、現代社会に戻ると、そのギャップにこころの均衡が保てなかったかもしれません。カパウイロッジは、ちょうど良い緩衝役になっていたのです。

私たちは行きに乗ったのと同じ飛行機に乗り、緑の王国を後にしました。

首都キトへ戻るバスの中でも、日本に戻る飛行機の中でも、このアマゾンでの体験はフラッシュバックのように思い出されてきました。それが落ち着くまで、ある程度の時間が必要でした。アマゾンでの出来事は、それほど、私たちに強い影響を与えたのです。

ひとと離れ離れになって
寂しくなったことはありますか？

あなたが一番
寂しくなったときはどんな時？
誰と離れたときですか

もし思い出せなかったとしたら
どこかの時点で
誰かと離れてしまって
すごく寂しい思いをしたのかもしれません

愛情を感じれば感じるほど
離れたときに寂しさを感じるものなのです

夢見編
その25

『ワシの世界と
コンドルの世界の融合』

旅の途中で、南米の先住民族の間に古くから伝わる伝説があることを教わりました。『ワシの世界とコンドルの世界』の言い伝えです。

そのストーリーは、

『ひとつだった世界は、ある時、ワシの世界とコンドルの世界に分離しました。ワシの世界は、知性と科学を高度に発達させていきました。一方のコンドルの世界は、直感と自然との調和を発達させていったのです。それぞれが独自に発展をしていきましたが、その発展が頂点を迎えた時、ワシの世界は、精神面で自らを破壊するほどに衰退していました。また同時に、コンドルの世界でも、物質面で枯渇し衰退していたのです』

このようなお話です。そして、この続きは、

『地球が新しい段階に入る時、ワシの世界とコンドルの世界は再び統合される』という予言で結ばれていました。ワシの世界とコンドルの世界が、もともと一つであったことを思い出し、お互いの知恵と叡智を分かち合い、お互いがお互いを救い合うというのです。

この旅を始める前、アチュアル族のことを、野蛮な部族だという先入観を持っていました。そして、私たちはとても進んだ文明から来たという自負がありました。ところが、実際に森でアチュアル族の分かち合う暮らしに触れた時、「私たちは、本当に進化したのか？」という想いが湧き上がってきました。

さらに、森を出て街に戻ってきたとき、街に住むアチュアル族のリーダーと話す機会がありました。彼はこう言います。「私達の目から見て、あなた達の文明は、足を引っ張り合っているようにしか見えない」と。そして、「森では全てを分かち合っている。家を建てるにしても、なにをするにしてもみんなで協力しあう。でも、こちらの世界では、なにかをしようとしても、みんながじゃまをする」とも。

アチュアル族からみると、私達の築き上げた文明は、暮らしにくい理解不能な世界だったのです。

テクノロジーは、私たちの生活を快適に便利にしました。しかし、アマゾンの伝説で言われるように、精神面では、お互いを傷つけ合うほどの競争と所有の世界になってしまっています。これからの時代、私たちは、テクノロジーの世界に「協力」と「自然との調和」を取り入れていくことになるでしょう。「奪い合いと競争」の世界から「分かち合いと協力」の世界へのシフトです。

いま世界各地ではじまっている、分かち合いの活動はこれからさらに活発になっていくと思います。例えば、大富豪が資産の多くを死後寄付するような動き。読み終わった本を本がない地域に寄付するような世界的な動き。次の人の料金を払う事ができるレストラン。お金を介せずにお互いのスキルを交換する仕組みの開発など、身近なところから世界的な規模のものまで、分かち合いと協力への変化が感じられます。

一方のアチュアル族も、私達の持つ医療やテクノロジーの恩恵を受けていくことでしょう。それと同時に、お金とも徐々に深く付き合っていくことになると思います。

彼らに一番の幸せは何かと聞いたとき、その答えは「家族」でした。子供が増え、育っていくことが喜びなのです。そして、同じように一番の不幸せは何か聞くと、その答えも「家族」と返ってきました。子供が毒蛇に噛まれたら、ジャングルでは何も出来ない、それで不幸の答えも「家族」なのです。

彼らも次世代のために、私たちの文明に歩み寄っていくことでしょう。

私たちも彼らも、もう後戻りはできないのです。

この地球をワシとコンドルの２つの翼が、互いに助け合い補い合いって飛ぶ世界が始まろうとしています。アチュアル族から教わった、私たちの世界の次への鍵は『分かち合い』と『協力』です。この世界の転換は、とても困難なように思うかもしれませんが、インターネットで繋がった現代は、一瞬にして何億人もの人々を繋ぎます。

先住民の予言が示すように、もうすぐそこに扉が開いた世界があるのです。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

もっと周りの人と
分かち合うことを選ぶとしたら
なにを分かち合いますか？

才能でしょうか
豊かさでしょうか

そして、

自然と調和するために
あなたの人生のなかで
やりたいことは
なに？

最初の
小さな一歩は
なにを選びますか

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

おわりに

さて、最後までお付き合いいただきありがとうございました。本書でのアマゾンへの旅は、いかがでしたでしょうか？

この本のタイトルに「２５の教え」と入れましたが、教えはどこに？と思われた方もいるかもしれません。私がアチュアル族から教わったことのひとつに、「答えは自分の中にある」というものがありました。アチュアル族は、人生で重要なことは、すべて自問して夢（ヴィジョン）から答えを得ます。

シャーマンや長老は、その読み解き方を手助けするだけなのです。そこで、本書でも教えはこうですと書くことなく、全てを質問の形にしてお届けしました。私たち一人一人の意識は叡智の塊です。本書を読むことによって、未知の世界への探究心を刺激するだけでなく、すでにあなたの心の中にある「叡智」へと辿りつく切っ掛けになれれば幸いです。

アマゾンの旅を経験して、私の内面も大きく変化しました。それに伴い、私が開催するワークショップのスタイルも、セミナールームの中だけにとどまらず、森、山、海に実際に行って、そのなかで気づきを得るようなハイブリッドな形式に変わってきました。

そして、今後はセブン・ジェネレーションズのみなさまが制作されました今回の旅の記録映画と併せて全国でアマゾンの「上映会＋お話会」を催したいと思っています。ひとりでも多くの方にこの大切なメッセージをお届けしたいからです。『私の街に来て欲しい』等のご要望がありましたら、お気軽にメッセージを頂けたらと思います。

また、「分かち合い」と「協力」の私自身の活動として、身の回りの１０００人のひとにご馳走する「１０００人ランチ」プロジェクトやご馳走する機会をプレゼントする「ミリオンカフェ」プロジェクトということをやっています。ホームページに詳細がありますのでよかったら御覧ください。

近い将来、再びアマゾンを訪れることになると思います。その時は、本書によってアマゾンに興味を持ってくださった方々と一緒にアチュアル族に会いにいければと思っています。そんな冒険家のリーダーをガイドするのは、とてもワクワクする事だからです。

【無料プレンゼント】

本書を最後までお読みいただいたみなさまに、この本には入れられなかった、ハーバード大学での幸せに関する研究と、アマゾンでの暮らしの共通点についてお話しした音声をご用意しました。以下のアドレスからダウンロードできるようにしてありますので、もしよろしければ聞いてみてください。

→https://www.fvs.jp.net/form/?id=89&key=ODkxMTIzNDA

ヒロ　カズマ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ヒロ　カズマ　プロフィール

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

大阪生まれ。不動産オーナー、セミナー会社経営、自由人。ライフワークとして「自由に与え・自由に受け取る生き方」を伝え広めている。子どもの頃からアインシュタインに憧れ、大学では物理学を専攻。短い会社勤めの後、和歌山でウインドサーフィンスクールの経営する。理想の波を求めて、２０年間にわたって、毎年冬にオーストラリアで過ごすというユニークなライフスタイルをエンジョイしてきた。

その後、マインドマップ、フォトリーディングなど能力開発やセミナーに興味を持ち研究を深める。どうしたら人が自由に才能を伸ばし、豊かに生きることが出来るかをテーマに、これまで多くの人を対象に、講演・セミナー・コーチングを行ってきた。

四代目として豊かな子供時代を送ったために、独自の金銭哲学を持ち、そのユニークな視点からの明快なアドバイスを求め、全国からファンが大阪のセミナールームを訪れている。1000 人にランチをご馳走する『1000 人ランチ　プロジェクト』。500 人が与えることにチャレンジできる『ミリオンカフェ　プロジェクト』など、『21 世紀の旦那道』をユニークな形で伝えている。

共著として「独立成功のカギ　～メンターのチカラ 2」がある。

アマゾンの旅が教えてくれた

人生が豊かになる２５の教え

2017 年 7 月発行 初版

著者 － ヒロ　カズマ
発行 － オフィスひろかずま
編集協力 － ライフワーク新聞　末吉宏臣

Copyright(C)2017 オフィスひろかずま All Rights Reserved.